

## 釣れ釣れなるままに

2012年思い出の釣行記 PART. 4

# 海の恵みに合掌

## 鹿島釣狂

### 大海原に向かって合掌

6月20日早朝、携帯電話が鳴った。発信元を見ると大前副会長からだ。4回大会が近付いてきているので情報を交換するためかなと電話に出ると女性の声が出た。大前氏の姉からで、妙に淡々とした口調で雲膜下出血による大前氏のご逝去を知らされた。しかし、電話の最後には彼女の嗚咽を抑える息遣いが聞こえてきた。

釣遊会便りに訃報連絡を入れて会員に送った。葬儀には古くからの会員が駆けつけたが突然の訃報に驚きを隠せない様子だった。釣遊会からは弔旗と彼の優勝時の写真2枚をA4に拡大して収めた額を飾らせていただいた。また、遺族からの依頼で、彼が長年愛用してきた竿やリールを三脚に掲げて祭壇に飾った。大前氏は釣遊会役員として長きにわたって献身的な働きをしてきており、大物キラーとしてもその名をほしいままにしてきていた。第4回大会の準備もリュックに丁寧に整えられ、後はバツカンにエサを準備するだけとなっていた。

釣遊会第4回大会が7月1日、様似港～襟裳港で開催された。30年も前に釣遊会を退会された佐々木清氏、札幌医釣会会長の中江政美氏、とんとん会会長の荻野一利氏、最近では常連の吉田潤一氏の4名をお客様として迎え、バスは満員で出発した。様似港釣りデッキでは他界された大前氏を偲び海原に花束と線香を手向け、彼がこよなく愛したタバコに火を点け、ビールを海に注いで黙祷した。そして、いつも芳醇な獲物を捧げてくれる大海原に感謝し、命を頂いてきた魚たちにも合掌した。満天の星空のもと波風ともに穏やかで、潮回りも大変良く、大前氏がこの釣り日和を運んできてくれたものだろうか。

## 嫁なし

私は山中覆道裏に入った。昨年の7月に入ったときは大物アブラコやカジカが竿を揺らしたのだが、ピクリとも来ない。それで次の狙いとしていた出岬に展開した。いかにも大物が潜んでいそうな昆布原が広がっている。深くなった横溝にカジカを狙ってゴロネット仕掛けを打ち込んだが魚は出なかった。今度は前方が開けた沖根に遠投するとアブラコが出た。集中的にそこに打ち込むと40cm前後のアブラコが5本出たのだが、カジカが出ない。カジカの出そうなところをあちこちと打ってみたが、根掛かりがひどくて仕掛けの消耗が激しくて断念せねばならなくなった。

嫁を捕るための移動場所を山中平盤とした。この平盤はすっかり干上がっていて、釣り人は一人もいなかったので自由に場所を選定することができた。前に出て岩と岩の間を通したり、下がって砂場の湾洞に遠投をかけたり、舟道に竿を入れてみたりしたがカジカはおろかアカハラも出なかった。結局、最後まで嫁を捕ることは出来ず、成績のほうも惨敗に終わった。



移動先の山中平盤でも結局カジカは出なかった



本日の釣果はアブラコ5本に終わってしまった。

## 審査結果

### 審査結果

優勝	中江政美	1588点	(アブラコ530mm+カジカ 423mm+6350g)	下近浦
準優勝	前野達志	1444点	(アブラコ457mm+カジカ 440mm+5470g)	琴似
3位	岡英成	1397点	(アブラコ418mm+カジカ 405mm+5740g)	琴似
4位	佐々木清	1345点	(アブラコ455mm+タカノハ400mm+4900g)	夕日ヶ丘
5位	嵐光博	1278点	(アブラコ467mm+カジカ 285mm+5260g)	琴似
身長優勝	島強二	1176点	( <b>タカノハ530mm</b> +アカハラ335mm+3110g)	様似港

優勝した中江氏は、下近浦に下りた後カジカが竿を揺らして早々に5本そろえ、日が昇ってからは近浦では珍しいアブラコの53cmをモノにした。嵐氏がいつも狙っている所だということで、嵐氏が悔しがること頻りであった。昼食時に医釣会大会の案内をされたが、リベンジに燃えている者もいることだろう。

身長優勝の島氏は谷口氏、吉田氏と共に様似港に入り、釣果が伸びない中、釣遊会での最長記録となるタカノハを釣り上げた。写真に写っている笑顔以上に彼はルンルン気分的高级魚タカノハを堪能したのであろう。

準優勝は前野氏であった。琴似に西川、岡、嵐氏を従えて、自分の得意とする溝や昆布根原を譲っての釣果である。暗い内はパツとした釣果は無かったが、最干潮を過ぎて潮が込みだしてからのものだったらしい。3位の岡氏も同様にアブラコやカジカの穴場を見つけたようである。彼の姿は山中にいた私からも見える位置に居たので今後の参考にしたいものだ。嵐氏も5位にくだり込んだ。琴似に下りてすぐにカジカを上げた西川氏は、余裕の

釣りになるはずだったが岩盤に出てからの釣果が無く、ふて腐れてバツカンを置いたところに戻って出した竿にアブラコが来て、何とか面目を保った。最近人気の琴似と様にそれぞれ4名が入ったが、今回は琴似に軍配が上がったようだ。

4位の佐々木氏は夕日ヶ丘に入って、故大前氏が最近得意としてきた溝を狙って大物アブラコ、タカノハ、クロガシラを揃えてきた。旧年の仲間であった大前氏がこの釣果を導いてくれたものだろう。



入賞者の顔ぶれ

左より3位：岡、優勝：中江、準優勝：前野、身長優勝：島（タカノハ53cm）

### 桂沢ヤマメ・芦別川ニジマス

7月の大会でヤマメ釣りが話題となり西川氏が語った。「桂沢湖の上流にヤマメが生息している。過去にヤマメ愛好会があってヤマメの放流事業やヤマメ釣り大会を催していた。その名残が桂沢湖でサクラマスとなり、子孫繁栄を繰り返しているものと思われる。数は少ないが確実に釣れる。エサはイタドリ虫で、昨年夏に採取したものを保存してあるので一緒に行ってみないか。竿は2.7m、ハリは5号、ハリスは0.6号程度がよいだろう。」早速、7月8日の日曜日に同伴していただく約束を取り付ける。

釣り道具に自信が無く、2.7m～3.0mのズーム式の溪流竿、道糸に1号のナイロンテグス、インジケーター、板鉛中通し軸（なかなかの優れものだ。へら釣りで使う道具らしい）、ヤマメバリ4、5、6号、さらにエサとしてブドウ虫とイクラを購入した。そして、ヤマメが駄目なら芦別川でニジマスをと、どの様な溪相にも対応できるように3.3～3.9、4.0～4.4、5.3～6.1のズーム式振り出し竿3本を用意した。

日曜日、3時に目を覚まし西川宅へ向かうと、照明が漏れる物置から西川氏が出てきた。物置には自室には入りきれない釣り道具や仕掛けが整然と並べられてあった。西川氏の荷物を積み込み一路桂沢湖へと向かった。私が予め思い描いてカーナビに設定しておいた入

溪場所とは違うようだ。

西川氏が案内してくれた林道への入口にはゲートが閉じられカギが掛かっていた。思案した結果、国道に架かる橋から川に下りるルートを探すことにした。西川氏が何度か入ったことがあるようだがその橋が見つからない。三芦トンネルまで行ってからまた戻ることになる。橋の上から覗いてみて一箇所だけそれらしきところはあるのだが簡単に下りていけそうもない。諦めて、ゲート前の空き地に駐車し、そこから林道を歩くことにした。準備を整えて歩き始めたが入溪場所は思ったより距離があって30分以上もかかってしまった。

この川には砂防ダムが2箇所あるがその上流にもヤマメは生息しているらしい。川が二股になったところに下りて、通常はそこから上流に向かう者と下流に向かうものとの二手に分かれるらしいのだが、今回は水流が少なくて二人して釣り下ることになった。西川氏が私に先行を譲ってくれる。しかし1時間ほどやってもアタリは一度も出なかった。諦めて川から上がりもと来た道に戻ることにした。

さて次はどうでしょうか。今度は夕張に抜ける道路沿いの川にむかうことにした。しかし、ここでも同じだった。やはり下り口を見つけられなくて夕張に抜けるトンネルまで来てしまった。もと来た道に戻り、カーナビで見当をつけて探すと一台の室蘭ナンバーの車がとめてありゲートが閉じられていた。そこに車を停めて先へと進み、川にかかる橋から覗くと魚が群れている。ヤマメかもしれない。物音を立てないように準備して、橋の上からそーっと仕掛けを投入するとすぐに魚が食いついた。しかし、残念ながら竿を曲げた主はウグイだった。水量の無い川を遡っていくが溜まりにはウグイが竿を揺らすだけでヤマメの気配は感じられない。ヤマメは諦めた。

芦別川に向かう。この川は芦別に勤務した時に足げく通った川で、初めて50cmオーバーのニジマスや蓬莱マスを手にした川である。幸い、川へと向かう折口には車が駐車しておらず、先行者がいないことを確認して川に出た。やはり水量は少ない。過去の経験から一番の実績があるところで竿を出したが、私に1匹の虹鱒だけだった。しかし、川を下っていくと3名もの釣り人に出くわした。私の次の狙いとしていた淵で竿を出し、そこそこの釣果だったがウグイも多かったと話してくれた。エサはミミズだったそうだが、下流に向かうのは諦めるほかはない。入溪した赤い橋から上流はやっていないというので、そこに向かったが30cm以下のニジマス5匹が相手してくれただけだった。浄水場の堰堤があってそこが最後と竿を出したが、そこでは結局ウグイしか釣れなかった。うーむ残念。

## 山の水族館

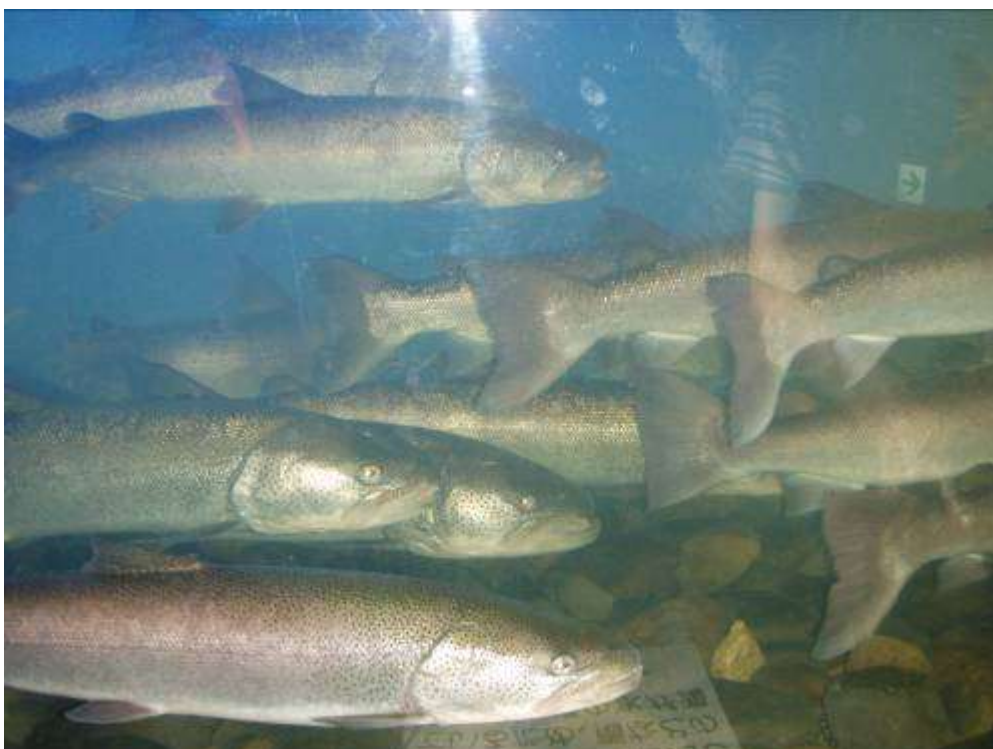
7月15日、16日の連休では何を狙おうか。この時期は夏枯れで釣りモノがない。釣り新聞では日本海南部や内浦湾で夏イカとヒラメが上向いてきたという情報を載せている。昨年の実績ではヒラメが良かったという大根海岸に出撃してみようと、サクラマス用に購入したルアーを準備する。また、船釣り用のバケ尻仕掛けを真似て、投げ釣り用のオオナ

ゴ仕様を作ってみた。ルアーと兼用で狙ってみようという魂胆である。

久しぶりで息子も誘ってと思ったが手強い先客があった。女房である。3人で1泊旅行をしましょうというのである。先日のテレビで留辺菘の「山の水族館」が話題となっていたのでそこに行ってみようということになり、息子が周辺の宿泊先をインターネットで検索している。生憎とっていいのか分からないが、どこも満杯なので日帰りドライブとなった。北海道ガーデン街道で旭川にある上野ファームが気になっていたのですがコースの途中に入れてもらうことを提案したが却下された。そんな余裕はないそうだ。

実は先日、イエローハットでETCを購入した。昨年9月に高速道路無料化の実験が終了した時には思わぬ需要で予約が必要だったが、すぐに取り付けてくれた。女房の講釈では「日曜・祝日は料金が半額となり、名寄に住む娘夫婦を訪ねる時の高速料金が馬鹿にならない。ETCを購入すればすぐにも元が取れる」という。なるほど、今回のドライブのジャンクションで通常料金の後に半額の料金がアナウンスされたが、女房の打算は的を射たものだった。

7月7日にオープンした「山の水族館」では、売り物であった日本最大の肺魚が前日14日に死亡していたのは残念だったが、1mを超えるイトウが群を成して泳いでいる姿が圧巻だった。こんなのを竿に掛けて、その虜になってしまった釣り人のことが肯ける。



「山の水族館」で群れをなして泳ぐイトウ

昼飯は北見市留辺薬町駅前にある天井が有名な「加根志め食堂」でとった。息子たちは

もちろん天井で、天邪鬼の私は天ザル蕎麦を注文した。まだ店を開けたばかりらしくて、注文の品が出てこないうちにも続々と天井を目当てにしたお客で店があふれかえってきた。出てきた天井は、芸術的に高く盛りつけされ、丼の蓋によけないと食べることができない。盛りつけの技術もそうだがカラッと揚げられた天婦羅はサクサクと口の中で崩れていって全部食べきってももたれる感じがしなかった。



「加根志め食堂」の天井と天麩羅ソバ

帰りに旭川のフィッシュランドに立ち寄り、ヒラメ釣りのためにオオナゴと船釣り用仕掛けの替え針を買った。ヒラメ用のルアーは品切れ状態だった。店員によると黄色いルアーが売れ筋だがもちろんそれはなく、紹介してくれたジグミノー2個を購入した。ついでにマイカ釣りの道具もバケットに入れてしまった。

### 甘くは無いヒラメ釣り

7月16日、午前2時に起床して高速を利用して一路大塚海岸へ向かった。5時には準備完了して、3本の投げ竿にタコキャップを被せたオオナゴをつけて遠投し置き竿とした。そして、購入したピンクのルアーでヒラメを狙った。周辺では3名がヒラメを狙ってルアーを飛ばしていた。昨夜から渡り蟹を狙っていた隣の釣り人は市販の仕掛けで4本の竿を出していたが釣果がない。まだ早いということだ。

30分ほどルアーを飛ばしたがアタリがなく、置き竿を上げてみるとエサが全くなくなっている。ヒラメとは考えにくく、犯人はカニかフグだろう。オオナゴを付け替えて竿を思いっきり振ってみると、途中でオオナゴの胴から下が折れて千切れ、海中にダイビング

してしまった。何度か試したが犯人はどうも自分にあるようだ。私と同じようにヒラメの合間にカレイでもと竿を出している釣り人に聞くと、エサはそのままの状態に戻ってきているという。そんなことを繰り返しながら4時間しつこく粘ったが、結局ヒラメの感触は得られなかった。仕掛けを作っている時はヒラメがすぐにでも釣れてしまいそうな心持でいいのだが、そうそう甘いものではなかった。

最後に、遠投の練習をしてみた。垂らしを長くしてオモリを砂浜につけてからクオータースローで思いっきり竿を振る。道糸の放し方の感覚がつかめずに仕掛けが右方向にぶれてしまったり、天婦羅になったりで、自分には上段の構えがむいているのだと観念した。

帰りに、雄冬湯泊岬の防潮堤に立て掛けられた梯子を確認する為に浜益経由で帰ったがやはり梯子はなかった。通り慣れた湯泊岬でイカ釣りやソイ釣りをする時は、自分で梯子を用意するしかなさそう。途中、青山で月形に抜ける道を通り越してしまって、建設中の当別ダムを見学することとなった。

当別ダムは民主党政権になってからの事業種分けで物議をかもし出したが、工事は進められているようだ。広大な緑の大地が赤茶けたような黄土色に変色して、その底を当別川の流れが蛇行している。そして何台もの重機が川底を掘り返して、ダンプが引切り無しに行き交っていた。工事の概要が書かれた看板をみると、昭和45年から水質調査や地形・地質調査を開始しているというから、今から40年以上も前に予備調査を実施しているのだ。調査だけでも莫大な費用がかかっており、引き返すことは出来なかったのだろう。ダムは、洪水調節、流水の正常な機能の維持、かんがい用水および水道水の供給を目的としているというが、当然のことながら魚道を設置するなど自然の環境を損なわないように進めてもらいたいものだ。人造湖とはいえ満々と水をたたえ、「山の水族館」で見たような1mを超すイトウが群れを成して泳ぎ、ダム湖に注ぐ支流にはヤマメが戯れているようになって欲しいものだと思いながら帰途に着いた。

## 親馬鹿振り

7月18日(水)は愚息と自分の休日が重なったので雄冬のイカ釣りに誘った。昨年の初マイカに気をよくしていたのか息子は二つ返事で頷いた。マイカ情報は全くない。この日は、二人とも早番で午後4時に勤務を終え、日暮れに向けて脚立を用意して出発した。国道から湯泊岬への降り口に立て掛けてあった梯子は漁師が撤去したらしく、自分で用意しなければならなくなったのだ。あの高さを立て掛けることができるのかが心配だが二人なら何とかかなるだろう。

途中、岩老～別狩間通行止めの標識が出ていた。17日～20日、22時～5時というものだ。この区間に湯泊岬が入るのだが、岩老までの区間で新たなマイカ場所を発見できればと考え先に進むことにした。雄冬の出岬なら条件はどこも同じようなものだろう。しかし、岩老漁港を過ぎても通行止めの気配はなく、どうも湯泊の先の天狗トンネルあたりが工事区間になっているらしい。



午後7時に現地に到着した。防潮堤から脚立を伸ばして立て掛けると下の岩盤に届いてほっとした。風が強く吹き、岬先端には波が打ち上がっているの、出岬の一番高いところで準備する。息子用の準備が出来てまずは息子から釣りを開始した。息子も仕掛けの準備等は少しずつ出来るようになってきているのだが、結び方が甘かったり微妙な調整をしたりするのに手間取るので、私がすることにする。慣れない手つきで作業しているのを見るとついつい我慢が出来なくなって手を出してしまうというのが現実なのだ。いつまで経っても親馬鹿は付いて回っている。薄暗くなってきたのでヘッドランプをつけてウキを通していると、蚊が手にとまった。慌てて払いのける。防虫スプレーを持ってきていなかったの、私とはともかく息子のことが心配になる。息子は蚊に刺されやすい体質なのだ。どこまでも親馬鹿である。

道具立ては投げ竿25号、2号ナイロン道糸、遊動式フロートスナップ付サルカン、75ケミカルライトを付けた棒ウキ8号、緑点滅水中ライト、ナイロン糸3号、エサ巻きテラ5号にカツオをエサにしたものだ。息子がウキ下を3ヒロにして流しているとその1投目で反応があり、この時期としては大きめのマイカをゲットした。マイカ釣りには丁度今が潮時になっていると思われる。こちらの準備にあせりを感じる。私の道具立ては3号磯竿、0.8号PE道糸、37ケミカルライトを付けたドングリウキ遠投、仕掛け糸2号ナイロン、虹色点滅水中ライト、エサ巻きテラ3号にササミを巻きつけたものだ。息子のものはごつくなるが遠投ができるようにし、私のものは繊細なアタリにでも反応できるようにした。二人で使い分けてどちらが有効かを試してみたいのだ。

私の道具立てが準備できた頃、息子がトラブルを起こした。風や潮の流れに押されて仕掛が根掛かりしてしまったのだ。ウキから下を全て失った。自分に用意したものをウキ下2ヒロにして渡す。息子がまたまた2杯目のイカをゲットしのだが、またまた根掛かりさせてしまった。今度はテラだけを取られたのだ。親馬鹿ぶりは止まらず、仕掛けを作り終えた25号竿を渡す。エサだけは自分で付けて流し始めた。またまた息子に3杯目のマイカが掛かってしまった。嬉しいのやら腹立たしいのやら、息子は何気にやっているのだが、私としてはこの時合いに竿を出せないでいるのだ。磯竿の方が準備できてようやく私も投竿を繰り返す。が、反応がない。時合いが過ぎ去ってしまったようだ。午後10時頃、なんとか私の磯竿にもマイカが乗ったのを最後にして親馬鹿ぶりを終えることにした。



本日の釣果

### 蚊に刺されやすい体質

次の朝、息子がウンウン呻いている。体中に虫刺されの跡が残され赤くなって腫れているのだ。夜中に引っ掻いたらしくその傷跡も生々しい。

「だから言ったろ。蚊がいるから気をつけろと。俺は蚊が腕をかすめた程度でも敏感に感じて、払いのけながら釣りをしていたんだぞ」

「親父はビールを飲んでいたはずなのになんで刺されないんだろう。まるで自分が鈍感なように思えてくる。O型だから刺されやすいのかな。それにいつ刺されたかも分からない。手の甲を刺されたのなら分かるけど、ジャージの上下を着ていたし長靴も履いていたのに太股から足の甲まで刺されていたのがよく分からない。ジャージの下に蚊が潜り込んだのかな。こんなに刺されているのだから1匹の仕業ではないだろう。しかし、そんなに入り込まれるはずはない。1匹で何カ所も刺すのかな。」

「『蜂の一刺し』という言葉もあるぞ。でも『蚊の一刺し』は聞いたことがないな。蜂は尻についた毒針が抜けて1回しか刺すことが出来ないが、蚊は口だから何度も刺すのではないか。昔、馬に集った虻が馬の尻尾に追い払われながらも何度も刺すのを見たことがあるから、蚊も同じように何度も刺すのではないのかな。オマエの皮はぶ厚そうなので一度刺したぐらいでは血を吸えなくて何度も刺したのではないか。まさか、俺の見ていないところでオマエ裸になって踊っていたんではないだろうな」

「酔っているわけでもなく、1匹だとするとなんと欲張りな奴なんだろう」

「蚊は体温の高い奴に食いつくと聞いたことがあるぞ、蚊に刺されないようにと着込んだせいで汗をかいて、美味そうな匂いを発していたのではないか」さらに、落ち込んでいる息子を慰める為に

「老いぼれの俺よりオマエの方が美味しい血を持っていたということではないのか」といつてはみたが、どれだけ親馬鹿振りを発揮すればよいのだろう。